

論 文

生活時間から見た障害のある学齢期の子どもと父親の関わり

福谷理恵*1

キーワード：生活時間、障害のある子ども、父親、ジェンダー、ワーク・ライフ・バランス、生活経営

1 緒 言

2004年から2005年にかけて収集された本研究のデータを、20年が経過した2025年に再考する意味があるのかどうかについて、最初に触れておこう。

総務省統計局が5年に1度行っている社会生活基本調査の結果で、本調査の行われた時期に最も近い2006（平成13）年のデータ¹⁾を見ると、「6歳未満の子供を持つ世帯」の夫の育児に費やす時間は週全体で33分、妻の側は3時間9分であった。2021（令和3）年には、夫の育児時間は1時間5分に増えているが、妻の育児時間も増えて3時間54分という結果であった。日本国内の調査結果だけを見ると夫の育児時間の大きな増加が感じられるだろうが、生活時間調査データを入手できる国々との国際比較で見ると、日本は未だに無償労働^{註1}の男女比が最も大きい社会でありOECD各国平均の無償労働の男女比率を拡大している国²⁾なのである。即ち、日本社会の生活時間データについては、夫の育児時間の増加は緩慢ながら徐々に増加しつつあるが妻の側の負担は一向に減らない、という評価が妥当なところである。

1965年から1966年に実施された生活時間の国際比較調査の方法にほぼ準拠して行われた我が国の松山調査^{註2}は、1972年、1991年、2013年に3度にわたって実施された。松山調査における父親の育児時間（未子の年齢0-15歳未満）の40年間の変化³⁾を見ると、1972年（平日11分：日曜12分）、1991年（平日13分：日曜32分）、2013年（平日14分：日曜49分）であり父親の育児時間は微増しつつあるが、同じ調査の母親のデータは1972年（平日90分：日曜78分）、1991年

（平日93分：日曜60分）、2013年（平日121分：日曜99分）であり、父母の育児時間の変化と併せて比較してみると依然として夫婦間の大きな時間格差が続いていた。このような状況を鑑みるに、本調査研究の障害のある子どもをもつ父親のデータを見つめ直してみることは、急速な少子高齢化の進行と個々人や家族のありかたの多様性が増し、さまざまな家族がケアシェアされる時代に向かっていく日本社会の夫妻の育児について検討していくうえで、今日でも役に立つ所が見出せるのではなかろうか。

もう一つの理由は、障害のある子どもをもつ父親に関する生活時間調査データは、現在までのところ見当たらないという状況による。国立情報学研究所の学術情報検索サイトCiNii Researchを使って、キーワード「障害児＋父親」で検索をかけると、1974年以降の障害のある子どもの父親関連の研究が138件表示された（検索日：2025年10月10日現在）。これを見ると、特に2000年代に入るとジェンダー論の観点からの研究など分析の視点の多様化がみられ、次第に障害のある子どもをもつ父親研究論文も増えてきた様子が分かる。検索するキーワードの表記を「障害のある子ども＋父親」とした場合には論文23件、「障がいのある子ども＋父親」では論文2件が見られた。しかしながら、障害のある子どもの家族研究全体からみると母親を対象としたものが圧倒的に多く、父親研究の論文数は母親研究の1/10にも届かない状況である。社会調査において最も難しい調査と言われているのは、家計調査と生活時間調査の二つであるが、障害のある子どもに関する生活時間調査研究については国際的にみて

*1 至誠館大学 現代社会学部

も非常に少ない。数少ない研究の多くは障害のある子どもを持つ母親を対象とした調査研究である。日本国内の研究で生活時間調査を行ったと言える研究については、香川県の自閉症のある子どもの母親についての縦断研究を行った久保(1975⁴⁾、1980⁵⁾、1984⁶⁾、1992⁷⁾と12事例の重度・重複障害児の母親の生活時間の事例分析を行った阿部・天野(2007)⁸⁾の研究がある。ところで、障害のある子どもと母親の生活時間の同時調査を行った研究については、残念ながら国内外においても未だ遠藤(2006⁹⁾、2008¹⁰⁾、2009¹¹⁾、2010¹²⁾、2011¹³⁾のものしかみつからなかった。一方、障害のある子どもの父親を対象とした生活時間研究は、筆者の探した限りでは国内外ともに無かった。

本研究は、筆者がかつて行った調査のデータ¹²⁾を用いて、障害のある学齢期の子どもが父親とすごした生活時間について分析を試みたものである。本研究の目的は、障害のある学齢期の子どもが父親とすごした生活時間に焦点をあてて分析を行い、父親の関わり方の特徴を把握することである。

2 方法

(1) 調査対象

広島県在住の障害のある児童生徒と主養育者を対象とした生活時間調査を実施した。

(2) 調査期間

調査期間は、2004年11月から2005年10月までの11か月間であった。

(3) 手続き

サンプリングのプロセスを図1に示した。広島大学研究倫理審査会の承認を得た後に、まず教育委員会に当たったが、調査依頼は断られた。次いで、社会福祉協議会に相談した所、障害のある子どもの親の会を1グループ紹介してもらうことができた。その後、このグループでのボランティア活動を通して次第に調査の

輪が広がっていった。障害のある子どもをもつ親の会複数団体および特別支援学級をもつ小学校の学級担任を通して調査を依頼し、主養育者である保護者に調査票を記入してもらった。通常学期中および長期休業中(夏・冬・春休み)の平日と土曜の4日間の生活時間の記録、付随する質問紙への回答を得た。

生活時間調査においては、調査日を特定し、回答者が同一日に一斉に回答する方法が通常はとられる。しかし本調査では、調査対象者に事前の調査説明を行った際に、いずれの団体あるいは学校においても「非常に大変な子どもをかかえての生活であるため、調査日を限定してその日の生活記録を採るなどということは不可能である。調査期間を数週間あるいは数か月と余裕をもって設定してもらい、その中で各自が記録を採りやすい日に行ってもらおう。そのように期日に幅をもたせても取れないほど忙しい状況の人は諦めてもらう、というようにしてほしい」という強い意見が出された。そのため、本調査における回答者のデータは、回答者が最も生活記録をつけやすかったゆりのある平日と土曜のデータである、という見方をした方が良い。

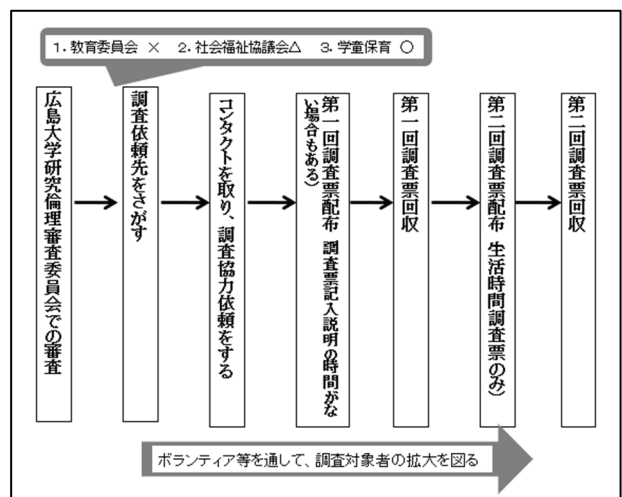


図1 サンプリングのプロセス

(4) 回収率

配布数：105部

有効回答数：通常学期中平日と土曜 42票(40.0%)、長期休業中平日 36票(34.3%)、土曜 37票(35.2%) であ

った。回答者の総数（43人（延べ人数））と各調査日の有効回答数が異なるのは、一部の回答者については4日間の調査日全ての生活時間調査に回答があったわけではなかったためである。

(5) 分析するデータ

子どもの生活時間データ（通常学期中の平日と土曜、長期休業中の平日と土曜の4日間）から、父親と一緒に過ごした時間を抽出して分析を行った。

(6) 分析の枠組み

本研究の分析の枠組みを図2に示した。本調査への記入は、「主養育者」である保護者をお願いしたものであったが、結果的に記入者は全員が対象児の母親であった。障害のある子どもの調査票と同時に記入してもらった主養育者の生活時間調査票の回答者に、父親の生活時間の回答票はなかった。しかし、子どもの生活時間調査票の「一緒にいた人（ある行動をしていた時の同席者）」の項目において、父親と一緒に過ごした時間に焦点を当てることにより、生活時間における父子の関わり方の特徴が見出せるかもしれないと考えた。分析においては、①父親と子どもと一緒に過ごした時間の全体傾向は〈行動・場所〉と〈タイミング〉の分析、②「父親と子ども」の場合（母親不在）の過ごし方と「母親も臨席している」場合の過ごし方の行動別平均時間量の比較、③母親が「有職」の群と「無職」の群における行動別平均時間量の比較、を行った。

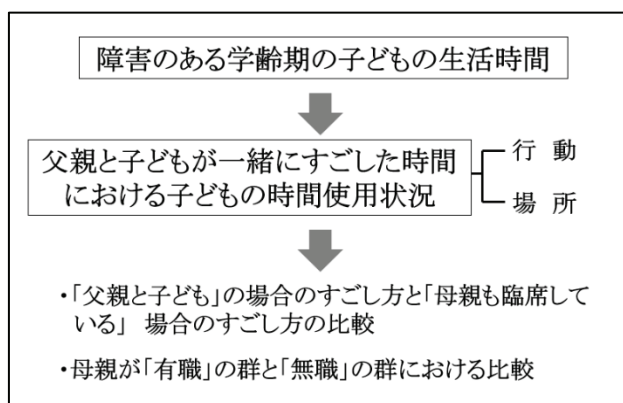


図2 分析の枠組

なお、本研究で使用する「主養育者」という用語については、「障害のある子どもの日常生活、とりわけ家庭生活において、最も身近に身の世話をしている養育者」のことに定義する。

(7) 障害のある子どもの生活時間大分類表・一緒にいた人項目表・場所項目表

表1. 障害のある子どもの「行動別平均時間量」大分類項目

大分類項目	中分類項目
生理的必要時間	1 睡眠
	2 食事
	3 身のまわりの用事
移動	4 移動
	5 付き添われて出かける活動
家事・手伝い	6 家事・手伝い
学校教育	7 組織的教育
学校教育以外の学習	8 ならい事
	9 自宅学習
遊び	10 会話・接触
	11 社交・交際
	12 休息
	13 テレビ
	14 読書
	15 受容的感覚遊び
	16 身体全体の遊び
	17 特に手を使った遊び
	18 特に頭を使った考える遊び
	19 ごっこ遊び
	20 おもちゃ遊び
	21 音楽的遊び
	22 その他の遊び
	その他の行動
24 その他の行動	
25 施設等の活用	

本研究における調査は、アフターコード方式を採用した。アフターコード用の行動・同席者・場所の項目（表1、表2、表3）は、国際比較可能なザライ方式³に基づく松山調査で使用した項目をベースとしながら、現代の養育及び療育環境に適用できるように筆者が修正を加えて作成したものである⁴。

障害のある子どもの「行動別平均時間量大分類表」を表1に掲げる。総務省統計局の「社会生活基本調査」の生活行動の分類は、10歳以上の人が記録できるように作成されており、障害のある子どもの実態をとらえるためにはそのままの適用は困難である。子どもの生

活の特徴が十分把握できるようにするために、原 芳男 註5（1978）の「幼児とテレビに関する生活時間調査」¹⁴⁾の項目を参考としながら、筆者が独自に作成したものを使用した。項目 1. 身の回りの用事、項目 2. 食事、項目 3. 睡眠、の 3 項目が大分類「生理的・必要時間」にあたる。項目 7. 組織的教育とは、大分類「学校教育」にあたる。項目 8. ならい事、項目 9. 自宅学習は、大分類「学校教育以外の学習」にあたり、項目 10. から項目 22. までの 13 項目が大分類の「遊び」にあたる。

ある行動をしているときの同席者である「一緒にいた人」項目は表 2 に、ある行動を行っているときの「場所」項目は表 3 に掲げた。

表 2. 「一緒にいた人」項目

1	ひとりきり
2	母親と一緒に
3	父親と一緒に
4	きょうだいと一緒に
5	その他の家族(同居の)と一緒に
6	非同居の家族と一緒に
7	友だち・年長の子どものと一緒に
8	友だちの母親と一緒に
9	学校の先生と一緒に
10	ヘルパーなど親以外の介護者と一緒に
11	公の場で一人
12	その他

表 3. 「場所」項目

1	自宅
2	自宅の近辺
3	他人の家
4	通学先の学校・学童保育
5	職場・仕事関係で行った先など
6	商店・各種サービス機関
7	飲食店および娯楽・宿泊施設
8	スポーツ・体育施設・教育・文化・宗教施設
9	学校に通学・下校
10	職場
11	療育・訓練施設
12	移動および待ち時間
13	その他

3 調査結果

本調査における子どもの生活時間の記録者については、父親あるいは母親に限定されることがないように「障害のある子どもの主養育者である家族構成員」に

依頼を行った。しかし調査結果の蓋を開けてみると、記録者は全員が対象児の母親であった。

(1) 調査対象者の属性

表 4. 回答者の居住地域 (N=43) (単位: 人)

広島市中区	3
広島市東区	3
広島市西区	7
広島市南区	6
広島市安佐南区	1
広島市佐伯区	1
広島市安芸区	6
廿日市市	1
福山市	1
三次市	1
東広島市	12
安芸郡府中町	1

居住地域について回答があった調査対象者については表 4 に示した。回答者の殆どが都市部および都市近郊に居住していたことが分かった。

表 5. 父親の一週間の就労時間 (N=43) (単位: 人)

34時間未満	1
35時間～42時間	2
43時間～48時間	12
49時間～59時間	9
60時間以上	19

表 5 は、対象児の父親の一週間の就労時間を示したものである。父親は全員、有給の仕事に従事しておりフルタイム労働であった。自営業は 6 人で、他の 37 人は雇用されていた。父親の一週間の就労時間は 60 時間以上が最も多く 19 人、次いで 43 時間から 48 時間が 12 人、49 時間から 59 時間が 9 人、43 時間未満は 3 人であった。

表 6. 父親の片道の通勤時間 (N=43) (単位: 分)

Min	0
Max	120
平均	34
SD	25

父親のふだんの片道の通勤時間は、0 分～2 時間の間にあり、平均 34 分であった。(表 6 参照)

子どもの状況については、男女比 (32 人: 12 人) で、年齢幅は 6 歳～15 歳 (平均年齢 9 歳 7 ヶ月) であった。

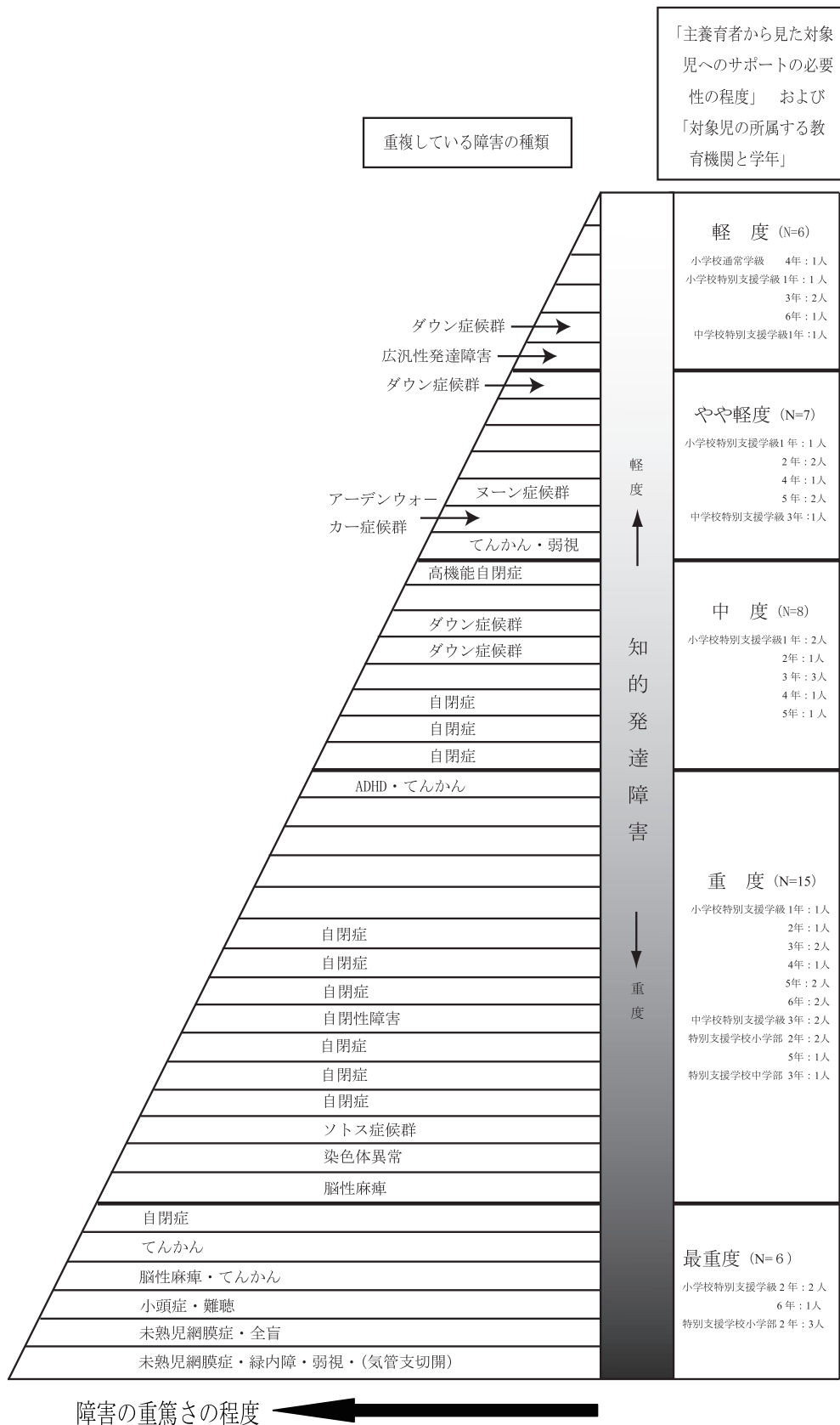


図3 対象児の障害の状況 (N=42)*

* 図3は、本項目について回答のあった調査対象者のみの状況を示したものである。

家族類型については、核家族が39人、拡大家族5人であった。なお、子どもの人数が父親より1人多いのはきょうだい1組含まれていたためである。子どもの障害の状態については、重複している場合は複数回答で答えてもらった。図3に対象児の概況を示したが、一人として同じ状況の子どもはおらず多様性に富むことが理解できた。

母親の就労状況については、有職が19人、無職が24人であった。有職者の働き方の内訳については、フルタイム労働者は1人のみで、他はパート等であった。

1週間の就業時間は、34時間未満が最も多い15人であった。子どもの養育において、母親が最も頼りにしている家族メンバーについて尋ねた質問については、「父親」という回答が41人（93.2%）であった。

次に、調査対象者全体の父子が一緒にすごした平均時間の集計結果を表7、表8、表9に掲げる。

(2) 障害のある子どもと父親と一緒にすごした時間の 子どもの行動内容

表7は、各調査日における、父子一緒にすごした時間全体の大分類項目の集計である。合計時間をみると、各土曜日においては、父子一緒にすごす時間が平日の倍近く長かったことが判る。

「遊び」については、同じ平日であっても、通常学期中は33分であったのが、長期休業中には45分増えて1時間18分となっていた。土曜日の「遊び」時間については、通常学期中は1時間48分であったのが長期休業中には2時間54分となり、1時間6分増加していた。

「学校教育」以外の他の項目についても全般的に、通常学期中よりも長期休業中の方が長く、どちらも平日より土曜の方が長かった。特に「生理的必要時間」（通常学期中平日3時間19分：土曜4時間46分、長期休業中平日4時間9分：土曜5時間57分）、「移動」（通常学期中平日6分：土曜1時間15分、長期休業中平日18分、土曜1時間37分）が、変化の大きい活動

であった。

表7. 父子一緒にすごした時間の子ども行動：行動別平均時間量（単位：時間・分）

大分類項目	通常学期中		長期休業中	
	平日(N=42)	土曜(N=42)	平日(N=36)	土曜(N=37)
生理的必要時間	3.19	4.46	4.09	5.57
移動	0.06	1.15	0.18	1.37
家事・手伝い	0.02	0.05	0.03	0.04
学校教育	0.00	0.03	0.00	0.00
学校教育以外の学習	0.02	0.06	0.03	0.06
遊び	0.33	1.48	1.18	2.54
その他の行動	0.05	0.15	0.03	0.22
合計時間	4.06	8.18	5.54	11.02

*まるめの誤差のため、各項目の総和と合計時間が一致しないことがある。

(3) 父子と一緒にすごした「場所」

表8は、父子と一緒にすごした「場所」についての集計である。いずれの調査日においても、「自宅」が最も長く、次いで「移動」時間となっていた。各土曜日には「商店・各種サービス機関」「飲食店および娯楽・宿泊施設」「スポーツ・体育施設・教育・文化・宗教施設」の合計時間が約1時間程度みられた。父親の存在は、学校が休みの日の外出や遊びなどのレジャー面において、大きな役割を示していたことが読み取られた。

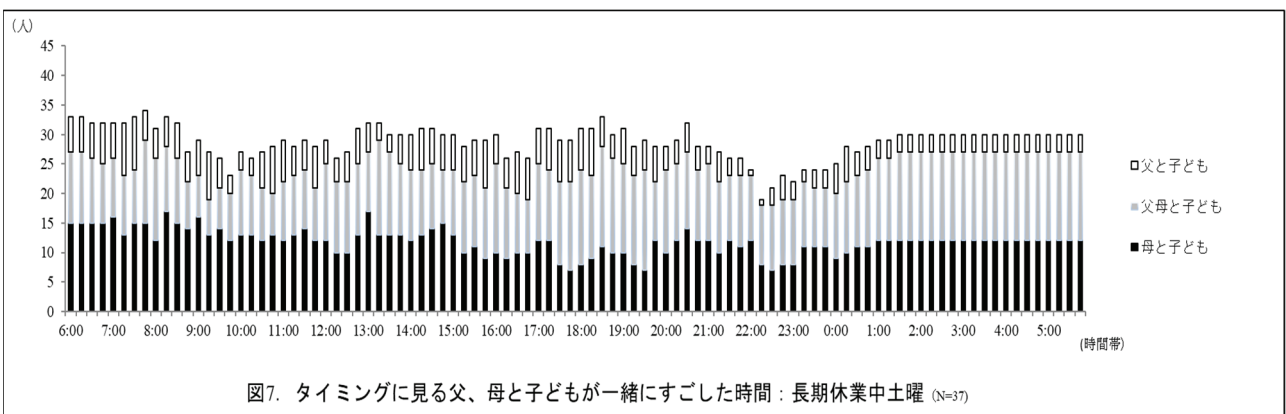
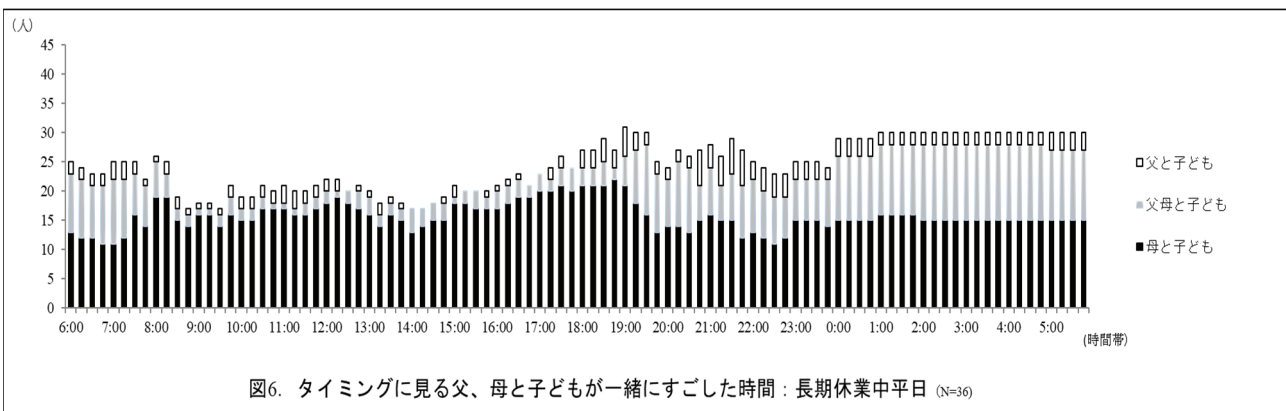
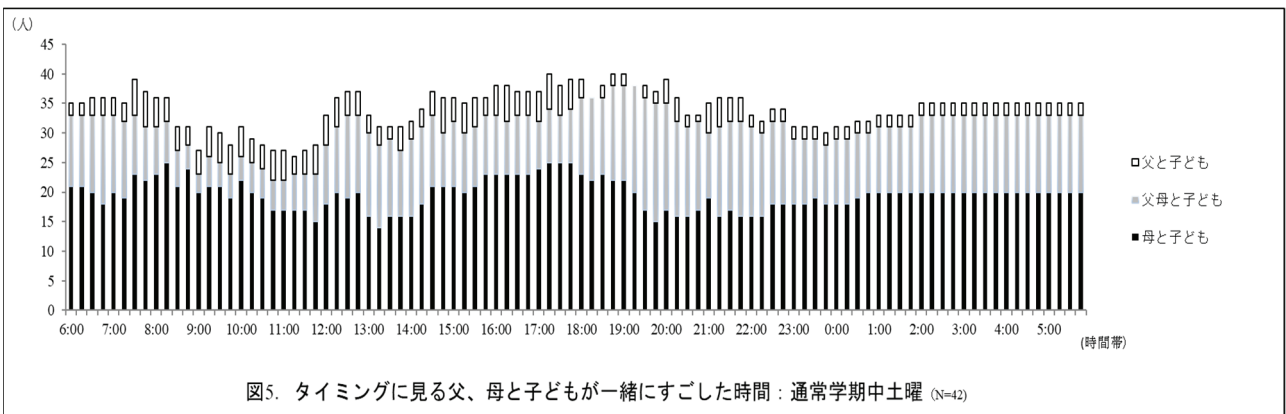
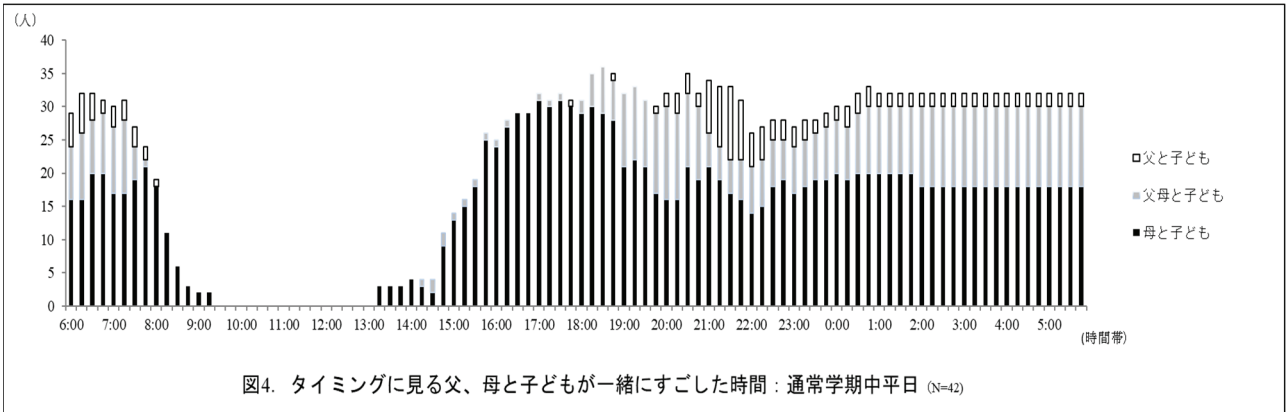
表8. 父子と一緒にすごした「場所」（単位：時間・分）

場所項目	通常学期中		長期休業中	
	平日(N=42)	土曜(N=42)	平日(N=36)	土曜(N=37)
自宅	3.58	6.14	5.20	7.24
自宅の近辺	0.00	0.06	0.00	0.06
他人の家	0.00	0.20	0.04	1.46
通学先の学校・学童保育	0.00	0.03	0.00	0.00
職場・仕事関係で行った先など	0.00	0.00	0.00	0.00
商店・各種サービス機関	0.03	0.33	0.01	0.26
飲食店および娯楽・宿泊施設	0.00	0.15	0.03	0.21
スポーツ・体育施設・教育・文化・宗教施設	0.00	0.07	0.10	0.11
学校に通学・下校	0.01	0.01	0.00	0.00
職場	0.00	0.00	0.00	0.00
療育・訓練施設	0.01	0.00	0.00	0.00
移動および待ち時間	0.03	0.39	0.15	0.48
その他	0.00	0.00	0.00	0.00
合計時間	4.06	8.18	5.54	11.02

*まるめの誤差のため、各項目の総和と合計時間が一致しないことがある。

(4) タイミングに見る障害のある子どもと父親と一緒に すごした時間

タイミング指標に見る相互関連の分析結果を図4から図7に掲げた。グラフの横軸は時刻を示し、縦軸は特定の時刻に行われたある種の行動についての行為者



数の<タイミング>を示している。三層のグラフの表示については、一番下段が<父親がいない状態で母親と子どもが関わった行為者数>、真ん中の段は<父親と母親と一緒に子どもと関わった行為者数>、一番上の段は<母親がいない状態で父親と子どもが関わった行為者数>である。父親は、母親と一緒に子どもに関わっている場合が多く、父親単独での関わりはどの時間帯も行為者数が少ない状態だった。それでも、各土曜日には、24時間を通して父親と子どもとの関わりが見られ、学校教育がなくなった休日の昼間の子どもの相手役としては、父親は大きな存在であることが読み取られた。

(5) 母親も臨席しているときの父子の一緒にすごした時間の特徴

表9は、母親も臨席している場面の父子の一緒にすごした時間を抽出して集計した全体平均である。学校休業日には、子どもの「生理的必要時間」の場に父親も比較的長くいるが、これは父親が子どもの「身のまわりの用事」に同席する時間が増えたことと、一緒に過ごす食事時間の増加による。遊び時間の増加は、「テレビ」視聴が長くなったことの影響が大きい様子であった。各調査日において子どもの「家事・お手伝い」場面に父親もいる時間が僅かながら見られた。

表9. 母親も臨席しているときの父子の時間(全体)：行動別平均時間量(単位：時間、分)

大分類項目	通常学期中		長期休業中	
	平日 (N=42)	土曜 (N=42)	平日 (N=36)	土曜 (N=37)
生理的必要時間	2.34	3.54	3.18	4.29
移動	0.05	0.58	0.17	1.15
家事・手伝い	0.02	0.03	0.03	0.02
学校教育	0.00	0.00	0.00	0.00
学校教育以外の学習	0.01	0.02	0.00	0.01
遊び	0.24	1.18	0.47	1.54
その他の行動	0.05	0.14	0.03	0.17
合計時間	3.10	6.28	4.27	7.58

*まるめの誤差のため、各項目の総和と合計時間が一致しないことがある。

(6) 母親の臨席していないときの父子の一緒にすごした時間の特徴

表10は、母親の臨席していない場面の父子のすご

した時間を抽出して集計した全体平均である。どの調査日においても、僅かではあるが「学校教育以外の学習」には、父親とすごした時間が見られた。「生理的必要時間」においては、父親単独でも学校休業日には「身のまわりの用事」に関わる時間が増えており、これは主として子どもの「お風呂」など体力のいる養育活動に父親が参加する割合が増えたためであった。長期休業中土曜日には、「遊び」については1時間1分、「移動」は23分で、これらの項目の長さを他の調査日と比べてみると、対象児が父親とすごしている間に別の用事にとりくむことが出来ている母親が存在することが見えてくる。

表10. 母親の臨席していないときの父子の時間(全体)：行動別平均時間量(単位：時間、分)

大分類項目	通常学期中		長期休業中	
	平日 (N=42)	土曜 (N=42)	平日 (N=36)	土曜 (N=37)
生理的必要時間	0.44	0.52	0.52	1.28
移動	0.02	0.18	0.02	0.23
家事・手伝い	0.00	0.03	0.00	0.02
学校教育	0.00	0.03	0.00	0.00
学校教育以外の学習	0.01	0.04	0.03	0.05
遊び	0.09	0.30	0.30	1.01
その他の行動	0.00	0.01	0.00	0.05
合計時間	0.56	1.50	1.27	3.04

*まるめの誤差のため、各項目の総和と合計時間が一致しないことがある。

(7) 母親の就業別に見る父子の生活時間

今度は、有職の母親群と無職の母親群における、父子の関わり時間の比較検討を行なってみる。表11から表16までは、母親の就業状況別に見る父子の生活時間を示したものである。

表11. 父子一緒にすごした時間の子どもの行動。母親の就業別

大分類項目	通常学期中 行動別平均時間量 (単位：時間、分)			
	平日		土曜	
	有職 (N=17)	無職 (N=25)	有職 (N=17)	無職 (N=25)
生理的必要時間	3.41	3.03	4.49	3.59
移動	0.05	0.08	1.19	1.04
家事・手伝い	0.00	0.04	0.04	0.07
学校教育	0.00	0.00	0.00	0.04
学校教育以外の学習	0.00	0.03	0.00	0.10
遊び	0.21	0.40	1.08	2.02
その他の行動	0.05	0.04	0.08	0.20
合計時間	4.13	4.02	7.27	7.47

*まるめの誤差のため、各項目の総和と合計時間が一致しないことがある。

まずは、通常学期中における行動別平均時間量の比

較(表11参照)を見てみよう。平日も土曜も、無職群のほうが「遊び」時間が長い(平日、有職群21分:無職群40分、土曜、有職群1時間8分:無職群2時間2分)が、有職群は平日も土曜も「生理的的必要時間」が無職群より長くなっていた(平日、有職群3時間41分:無職群3時間3分、土曜、有職群4時間49分:無職群3時間59分)。

母親の就労の有無による父親の関わり方の違いについて、各土曜の調査日の中で母親の就労時間が比較的長かったのは通常学期中土曜であったが、この日は母親有職群のほうが母親無職群よりも父親が子どもとすごした時間は20分短くなっていた(有職群7時間27分:無職群7時間47分)。

表12. 父子一緒にの時間の子どもの行動、母親の就業別

: 長期休業中 行動別平均時間量 (単位: 時間、分)

大分類項目	平日		土曜	
	有職 (N=15)	無職 (N=20)	有職 (N=15)	無職 (N=21)
生理的的必要時間	4.27	3.47	6.48	5.07
移動	0.32	0.09	2.10	1.19
家事・手伝い	0.04	0.02	0.04	0.05
学校教育	0.00	0.00	0.00	0.00
学校教育以外の学習	0.01	0.05	0.02	0.09
遊び	1.10	1.27	2.05	3.23
その他の行動	0.07	0.00	0.27	0.20
合計時間	6.21	5.29	11.36	10.23

*まるめの誤差のため、各項目の総和と合計時間が一致しないことがある。

*長期休業中については、就業状況について無回答であった生活時間回答者が1人いたため、

前掲までの表の人数より総和が減っている。

表12は、長期休業中の父子一緒にの時間の子どもの行動別平均時間量について、母親の就業別比較を示したものである。通常学期中と同じく、母親有職群は子どもの「生理的的必要時間」に関わる父親の時間が長い(平日、有職群4時間27分:無職群3時間47分、土曜、有職群6時間48分:無職群5時間7分)ことがわかる。長期休業中土曜の「遊び」時間も、無職群のほうが有職群より1時間以上長くなっていた(平日、有職群1時間10分:無職群1時間27分、土曜、有職群2時間5分:無職群3時間23分)。

さらに、<母親も臨席しているとき>の父子の一緒にすごした時間について、母親の就業別比較を行ってみる。表13と表14は、母親も臨席しているときの父

子一緒にの時間(行動別平均時間量)の本調査対象日4日間について、母親有職群と母親無職群の比較データを示したものである。

表13. 母親も臨席しているときの父子の時間使用、母親の就業別

: 通常学期中 行動別平均時間量 (単位: 時間、分)

大分類項目	平日		土曜	
	有職 (N=17)	無職 (N=25)	有職 (N=17)	無職 (N=25)
生理的的必要時間	2.58	2.18	3.58	3.08
移動	0.04	0.05	0.46	0.58
家事・手伝い	0.00	0.04	0.04	0.02
学校教育	0.00	0.00	0.00	0.00
学校教育以外の学習	0.00	0.02	0.00	0.04
遊び	0.18	0.28	0.51	1.28
その他の行動	0.05	0.04	0.08	0.17
合計時間	3.25	3.01	5.47	5.58

*まるめの誤差のため、各項目の総和と合計時間が一致しないことがある。

表14. 母親も臨席しているときの父子の時間使用、母親の就業別

: 長期休業中 行動別平均時間量 (単位: 時間、分)

大分類項目	平日		土曜	
	有職 (N=15)	無職 (N=20)	有職 (N=15)	無職 (N=21)
生理的的必要時間	3.33	2.57	4.57	3.54
移動	0.29	0.08	1.39	1.01
家事・手伝い	0.03	0.02	0.04	0.01
学校教育	0.00	0.00	0.00	0.00
学校教育以外の学習	0.00	0.01	0.02	0.00
遊び	0.43	0.53	1.19	2.11
その他の行動	0.07	0.00	0.23	0.14
合計時間	4.55	4.01	8.24	7.21

*まるめの誤差のため、各項目の総和と合計時間が一致しないことがある。

*長期休業中については、就業状況について無回答であった生活時間回答者が1人いたため、

人数より総和が減っている。

表13の通常学期中を見ると、平日では、母親の臨席しているときの時間は、母親有職群のほうが長くなっていた(有職群3時間25分:無職群3時間1分)ことがわかる。しかし、土曜には、母親無職群のほうが11分長い(有職群5時間47分:無職群5時58分)が、これは、下記の状況が合計時間に反映された結果であった。母親有職群の「生理的的必要時間」を父子一緒にすごす長さは、平日も土曜も無職群より40分以上長い(平日、有職群2時間58分:無職群2時間18分、土曜、有職群3時間58分:無職群3時間8分)。「遊び」については、土曜の無職群が長い(平日、有職群18分:無職群28分、土曜、有職群51分:無職群1時間28分)。

表14の長期休業中のデータでは、平日・土曜とも合計時間を見ると母親有職群の方が長くなっている(平

日、有職群 4 時間 55 分：無職群 4 時間 1 分、土曜、有職群 8 時間 24 分：無職群 7 時間 21 分)。それは子どもの「生理的必要時間」と「移動」が反映されての結果であった。一方で、遊び時間については、母親無職群の方が、平日では 10 分、土曜では 52 分長くなっていた（平日、有職群 43 分：無職群 53 分、土曜、有職群 1 時間 19 分：無職群 2 時間 11 分）。

表15. 母親の臨席していないときの父子の時間使用、母親の就業別
：通常学期中 行動別平均時間量（単位：時間、分）

大分類項目	平日		土曜	
	有職 (N=17)	無職 (N=25)	有職 (N=17)	無職 (N=25)
生理的必要時間	0.43	0.45	0.50	0.51
移動	0.01	0.02	0.34	0.06
家事・手伝い	0.00	0.00	0.00	0.04
学校教育	0.00	0.00	0.00	0.04
学校教育以外の学習	0.00	0.01	0.00	0.07
遊び	0.04	0.13	0.17	0.34
その他の行動	0.00	0.00	0.00	0.02
合計時間	0.48	1.01	1.41	1.49

*まるめの誤差のため、各項目の総和と合計時間が一致しないことがある。

表16. 母親の臨席していないときの父子の時間使用、母親の就業別
：長期休業中 行動別平均時間量（単位：時間、分）

大分類項目	平日		土曜	
	有職 (N=15)	無職 (N=20)	有職 (N=15)	無職 (N=21)
生理的必要時間	0.54	0.50	1.51	1.14
移動	0.03	0.01	0.31	0.18
家事・手伝い	0.01	0.00	0.00	0.04
学校教育	0.00	0.00	0.00	0.00
学校教育以外の学習	0.01	0.04	0.00	0.09
遊び	0.27	0.35	0.46	1.11
その他の行動	0.00	0.00	0.04	0.06
合計時間	1.26	1.29	3.12	3.01

*まるめの誤差のため、各項目の総和と合計時間が一致しないことがある。

*長期休業中については、就業状況について無回答であった生活時間回答者が1人いたため、人数より総和が減っている。

表 15 と表 16 は、＜母親の臨席していないとき＞の父子一緒の時間（行動別平均時間量）の本調査対象日 4 日間について、母親有職群と母親無職群の比較データを示したものである。

表 15 の通常学期中を見ると、平日と土曜の大差があるとは言えないが母親無職群のほうが合計時間は長くなっていた（平日、有職群 48 分：無職群 1 時間 1 分、土曜、有職群 1 時間 41 分：無職群 1 時間 49 分）。「遊び」については無職群は土曜が長く（34 分）、有職群は土曜の「移動」（34 分）が長くなっていた。しかし、母親の臨席していないときの父子の時間使用の通常学

期中のデータを見る限り、両群に大きな差があるとは言えない。

表 16 は、長期休業中の比較データであるが、通常学期中と同じく平日も土曜も、母親有職群と無職群の差に大きな違いがあるとは言いがたい。無職群は平日も土曜も「学校教育以外の学習」（平日、有職群 1 分：無職群 4 分、土曜、有職群 0 分：無職群 9 分）と「遊び」（平日、有職群 27 分：無職群 35 分、土曜、有職群 46 分：無職群 1 時間 11 分）に父親が関わる時間が若干長くあった。母親有職群は土曜の「生理的必要時間」（平日、有職群 54 分：無職群 50 分、土曜、有職群 1 時間 51 分：無職群 1 時間 14 分）と「移動」（平日、有職群 3 分：無職群 1 分、土曜、有職群 31 分：無職群 18 分）が無職群より若干長くなっていた。

4 本調査結果のまとめ

本調査結果における障害のある子どもが父親とすごした時間帯の特徴について、以下にまとめる。

- 通常学期中と長期休業中の各平日は、父親の就労により日中以外の短時間の関わりとなっており、関わり方の内容については朝夕の「食事」時間を共にするなど限られた数少ない項目であった。
- 通常学期中と長期休業中の各土曜には、子どもが父親と過ごす時間の増加がみられた。土曜日の子どもと父親との関わり方は、「遊び」と「移動」に関する項目が増加しており、父親のレジャー面で果たす役割が大きいと言えよう。
- 父親が子どもと関わる時間の特徴としては、母親が一緒の場に臨席しながら子どもと関わる場合が多く、母親が一緒にいない状況で父親が子どもと関わる時間は、土曜日においても短時間であった。
- 母親の就労の有無による父親の関わり方の違いについて、各土曜の調査日の中で母親の就労時間が比較的長かった通常学期中土曜を見ると、母親有職群のほうが母親無職群よりも、父親が子どもとすごした時間は 20 分短かった。

- ・通常学期中土曜に子どもの「遊び」に父親が関わった時間は、母親有職群 1 時間 8 分に対して母親無職群は 2 時間 2 分であった。母親有職群の中で通常学期中土曜に就労していた有職の母親 3 人の個票データを見ると、母親が職業労働に従事している時間帯に父親が子どもと一緒にすごしていたのは 1 人だけであり、その 1 人についても母親の全就労時間のうち半分の時間を子どもと一緒にすごしてただけであった。これを見ると、母親の就労において、父親の存在は、大きな支えとなっているとは言えなかった。
- ・本調査は少数サンプルであるため、この結果を障害のある子どもの父親の一般的な生活時間であると言うことはできない。

5 考察

本研究の行動別平均時間量データと社会生活基本調査のデータを直接比較することは、分類項目に多少の違いがあるため、厳密にはできない。しかし、日本社会の一般的な夫と妻の無償労働の比率状況についても参考にしながら、障害のある子どもを持つ父親の生活時間について考察を行ってみる。

まず、本調査対象の子どもの生活時間データから抽出した父親との関わり時間における「遊び」項目の平均時間だけでも、2006 年に行われた社会生活基本調査の「6 歳未満の子どもをもつ世帯」の夫の育児時間と比較すると長かったことがわかる。一方で、本調査データにおいても母親が子どもと一緒にすごす時間に比べると大きな差があり、必ずしも母親の負担を減らすまでには至ってないと考えられる点は、社会生活基本調査や松山調査の結果と同様であった。参考として本調査対象者の母親のデータで、同じ調査日に母子一緒にすごした平均合計時間がどうであったかを示すと、通常学期中（平日 11 時間 57 分：土曜 16 時間 41 分）、長期休業中（平日 14 時間 00 分：土曜 15 時間 39 分）と父親よりもはるかに長かった。^{註6} 繰り返すが、本

研究の調査対象者の父親は、本稿の調査と近い時期に行われた社会生活基本調査（2006 年）の「6 歳未満子供を持つ世帯」の夫の育児に費やす平均時間よりも長時間、対象児の養育活動に関わっていた。しかし、父親が子どもと一緒にすごす時間の大半は、「母親と一緒に」の状況であった。このことから、母親の就労を考慮しての関わり方はしていなかったと考えられた。本研究の調査回答者へのインタビュー調査¹⁵⁾を行った際には、本調査の回答者たちの世帯は性別役割分業により家庭を運営していた。その点についても、今回の父子の生活時間データをもとに改めて別の観点から更なる考察を深めたいと、調査から 20 年を経た現在において考える。

さて、先にあげたような結果となるのは、日本社会における男性の長時間労働の影響によるものなのだろうか。平田（2011）¹⁶⁾は、2006 年社会生活基本調査の政府統計匿名データをもとに無職の夫の家事労働時間について分析を行い、日本の無職の夫の家事労働時間は有職の夫より長いけれども、諸外国の有職の夫の家事労働時間よりはまだ短く、子育て期の無職の夫と有職の妻の家事労働時間については平日（夫 111 分：妻 214 分）、日曜（夫 98 分：妻 270 分）と報告している。藤原（2017）¹⁷⁾は、2001 年と 2006 年の社会生活基本調査のデータを活用して「夫の家事・育児参加の規定要因」を分析した結果、「夫の労働時間数が増えれば夫の子育て参加が減少することを示唆しているが、期待したほど高い負の相関ではない」ことを示した。同様に、松田（2001）¹⁸⁾も、夫の家事従事の規定要因に関する長時間労働の影響について「労働時間が長くなればなるほど夫の家事遂行度が減少するという関係にはならないとみられる」と分析していた。これら一連の研究結果から導き出されたことは、日本人男性の長時間労働を改善したとしても、一概に夫の育児を含む無償労働にたずさわる時間の増加には結びつかないということである。

貴志・平田（1999）¹⁹⁾は、「家事労働に対する態度に

ついでアンケート」と生活時間調査を組み合わせで行った結果、夫が家事に従事する要因は性別役割分業観よりも「家事労働の重要性に対する感じ方」が深く関わっていることを明らかにした。同時に、貴志・平田(1999)²⁰⁾は、育児や間接的育児である家事労働に、臨機応変に状況対応的に関わるべきだと考える男性であっても、実際にはなかなか体が動かない現実について、「意識改革」だけでは行動を伴うことは困難であることを示唆している。

この現象を解明する鍵として「ゲートキーピング」^{註7}というキーワードが考えられよう。これまでの日本社会において、男性は家事労働に含まれるケアワークについて、まず児童期に保護者から家事労働アクセスへの遠ざけのゲートキーピングを受け、結婚後にはおそらく妻から「自分(妻)がやったほうが早い」「夫がやると自分(妻)の後始末の仕事が増えてしまう」というような理由からゲートキーピングを受けて家事労働と育児参加へのアクセス不全状態が慢性化現象となり、夫自身に「参加しよう」と思いはあっても「遊び」など楽しくわかりやすい活動以外のケアワークには体が動かないのではないかと、という負の循環形勢仮説を提議したい。このことが、家族の中に特別なニーズを有するメンバーが存在する場合、現在でも顕著な性別役割分業という形になって夫妻の無償労働の分担に現れるケースが多いのかどうかについては、これからの研究に待つこととなる。

牧野(2010)²¹⁾は、1994年と2004年に子育てに関する6か国比較研究(日本・韓国・タイ・アメリカ・フランス・スウェーデン)を実施しており、家庭のしつけについて日本は「男子へのあまい傾向」が変化のないまま定着状態であったという結果を報告している。平井(2022)²²⁾は、1996年と2006年の社会生活基本調査の政府統計匿名データを分析した結果、夫の家事・育児参加によって妻の家事・育児負担は軽減されるどころかむしろ負担が増加することを明らかにしている。

1990年代後半から日本においても性別役割分業規

範が崩れ始め、多様性のある選択肢の中で、性別にかかわらず誰もが状況対応的に家事育児ができることが望ましいという考え方が広まりをみせるようになってきた。育児を含む家事労働の遂行には、理念よりも習慣の問題の方が大きな影響力をもつ。本研究では、障害のある子どもの多様なニーズに応じたケアが必要な家庭における夫の育児と生活経営への参画状況の可視化を試みた。本調査結果には、障害のある子どもの父親についても、家事育児に短時間しか携わらず、その内容も遊び活動に偏りがちという日本人男性の特徴が現れてはいた。しかし、その点について単純に男性側を批判する態度をとることは、拙速であると考えられる。

本稿の冒頭でも述べた通り、障害のある子どもをもつ父親に関する生活時間調査データは、筆者の探した限り、現在まで国内外において見当たらない状況である。このことを鑑みると、やはり諸外国においても障害のある子どもの家庭内における第一義的なケアに関わるのは母親である場合が多く、父親はその次の立場にあることが多いのではないかと推測される。

今後、海外の研究においても障害のある子どもと主養育者の生活時間調査が行われると、子どもと父親の関わり方についての国際比較も可能となる。

6 今後の課題

- ・本稿で扱ったデータの「母親の就業状態」別の分析と「母親の臨席の有無」については、行動別平均時間量の分析だけである。
- ・行動者平均時間については、本研究の調査対象者が少数であったことからこれまで触れてこなかったが、今後の検討方法について考えたい。
- ・夫の家事・育児への参加状況の背景要因として考えられる二重のゲートキーピング(児童期と結婚後)仮説の影響と生活時間の関係については、今後、検証方法を考える必要がある。

【謝 辞】

本研究の調査にご協力いただいた方々に感謝申し上げます。

〔註〕

註1 無償労働とは、賃金が支払われる労働ではないが、生活していくために必要な育児や家事、ボランティアなどの活動を指す。アンペイドワークとも呼ばれる。

註2 松山調査について：「1965年から1966年にかけて実施された生活時間の国際比較研究に、日本は参加しなかった。しかしながら、原 芳男をリーダーとする生活時間研究グループは、1972年に、経済企画庁（当時）の委託により、愛媛県松山市において、この国際比較研究と同じ調査方法もちいた生活時間調査を実施し、日本の生活時間配分の特徴を諸外国の生活時間配分と比較し、日本の特徴を分析した[経済企画庁国民生活局、1975]。」

¹⁶⁾ この調査は、略称「松山調査」と呼ばれる。松山調査では、国際比較研究と同じ調査方法を採用したので、行動の場所と同席者についても、詳細な分類を用いている。その後、1972年調査を引き継いだ生活時間研究グループは、1991年と2013年に同じ愛媛県松山市において、ほぼ同一の方法による生活時間調査を実施した（第2次、第3次松山調査）。1991年調査のリーダーは矢野眞和、2013年のリーダーは平田道憲であった。

註3 ザライ方式について：「世界各国の生活時間研究の発展に大きく貢献したのは、1965年から1966年にかけて実施された生活時間の国際比較研究である。この研究は、ハンガリーのザライをリーダーとして12か国が参加して実施された[Szalai、1972]。この研究では、国際比較を可能とするために、調査方法を統一したのであるが、生活時間に関する情報として、行動の時間量に加えて、場所と同席者の情報を質問している。その後、この国

際比較研究の経験をもとに実施されている統一ヨーロッパ生活時間調査（Harmonised European Time Use Survey (HETUS)、ヨーロッパにおける生活時間の国際比較研究）のガイドラインにおいても、行動の場所と同席者の情報を得ることが推奨されている[Harmonised European Time Use Survey ウェブサイト]。」¹⁶⁾

註4 「日本における二つの大規模な生活時間調査であるNHK国民生活時間調査および総務省統計局の社会生活基本調査においては、場所と同席者の情報は必ずしもじゅうぶんに収集されているとは言えない。しかし、行動だけでなく、場所と同席者の項目を加えることは、行動の時間量だけではとらえきれない社会的な側面を理解することに役立つ。」¹⁶⁾

註5 註2に記したように、原 芳男は、第1回目の松山調査を指揮した研究者である。

註6 本稿の調査対象者の母親のデータにおける母子一緒にすごした各調査日の平均時間が、遠藤(2010)¹²⁾の「主養育者の生活時間：一緒にいた人、通常学期中（平日と土曜）と長期中（平日）」の「対象児と一緒に」の平均時間と異なるのは以下の理由による。遠藤(2010)¹²⁾の方には、通常学期中の平日と土曜、長期休業中の平日の3日間の主養育者のデータについては、「生活時間調査票を自分の生活時間記録しか付ける余裕がなかったが自分の調査票記録だけでも送る」ということで子どもの記録はない状態で回答してくれた主養育者（通常学期中：平日3票 土曜2票、長期休業中：平日1票）の回答票も集計に含まれていたからである。一方、本報では、主養育者と子ども両方の回答が揃ったデータのみを使用した。

註7 ゲートキーピングについては、「Puhlman & Pasley (2017) は、母親のゲートキーピングを「父親と子どもの相互作用や父親の育児に対して、母親がコントロール行動、促進行動、抑制行動を用

いて日常的に一貫して行う行動で、父親の育児関与に影響を与える親同士の複雑な一連の行動的相互作用」と定義²³⁾している。

[引用文献]

- 1) 総務省統計局（2022）「令和3年社会生活基本調査生活時間及び生活行動に関する結果 結果の要約」
<https://www.stat.go.jp/data/shakai/2021/pdf/youyakua.pdf>
（アクセス日 2025.10.13）
- 2) 内閣府男女共同参画局（2020）「コラム 1 図表 1 男女別に見た生活時間（週全体平均）（1日当たり、国際比較）」
https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r02/zentai/html/zuhyo/zuhyo01-c01-01.html
（アクセス日 2025.10.13）
- 3) 今川真治・平田道憲（2016）「父親の育児時間の40年間の変化」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』65、241-248
- 4) 久保紘章（1975）「自閉症児をもつ母親の「大変さ」について —母親の生活時間調査と面接から—」『四国学院大学創立25周年記念論文集』505-530
- 5) 久保紘章（1980）「自閉症児をもつ母親の生活状況と意識 —岡山県における実態調査から—」『四国学院大学論集』47、83-106
- 6) 久保紘章（1984）「自閉症青年をもつ母親の生活と意識 —香川県における10年目の追跡調査—」『四国学院大学論集』58、139-170
- 7) 久保紘章（1992）「自閉症青年をもつ母親の生活と意識に関する研究 —香川県における20年後の追跡調査—」『研究助成論文集（障害児療育関連分野）』28、43-50
- 8) 阿部真理子・天野寛子（2007）「重度・重複障害児の母親の生活時間の事例分析 —家事・育児以外の活動を可能にする視点から—」『学苑・昭和女子大学紀要』796、98-105
- 9) 遠藤理恵（2006）「障害のある児童生徒の通常学期中における平日と土曜の生活時間」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域』55、389-398
- 10) 遠藤理恵・平田道憲（2008）「長期休業中における障害のある子どもの主養育者の生活時間：子どもの自立スキルとの関連から」『日本家政学会誌』59(2)、111-120
- 11) 遠藤理恵・平田道憲（2009）「障がいのある学齢期の子どもをもつ主養育者の余暇時間」『日本の地域福祉』22、77-81
- 12) 遠藤理恵（2010）「障害のある児童生徒の主養育者に与える学校休業日の影響に関する研究」広島大学大学院教育学研究科博士学位論文、1-345
- 13) 遠藤理恵・平田道憲（2011）「障害のある学齢期の子どもと主養育者の生活時間の相互関連」『生活経営学研究』46、25-34
- 14) 原 芳男（1979）「幼児の生活とテレビ視聴 —都市高層団地における幼児の生活時間調査を通して—」（幼児教育プログラム研究会『放送のための新しい幼児番組の開発』）放送文化基金、27-81
- 15) 遠藤理恵・平田道憲（2010）「障害のある児童生徒の養育に関する主養育者へのインタビュー —両親の性別役割分業と家庭内及び社会的支援のニーズについて—」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』59、381-390
- 16) 平田道憲（2014）「生活時間配分からみた行動場所と同席者の40年間の変化」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』63、317-325
- 17) 藤原真砂（2017）「生活時間研究視点による夫の家事・育児参加の規定要因に関する一考察」『総合政策論叢』33、117-126
- 18) 松田茂樹（2001）「夫婦の家事・育児分担の規定要因」（岩井紀子編『現代日本の夫婦関係』日本家族社会学会、全国家族調査（NFR）研究会）167-184
- 19) 貴志倫子・平田道憲（1999）「夫妻の家事労働時間に与える家事労働に関する態度の影響」『日本家政学

会誌』50(9)、915-924

20) 平田道憲 (2011) 「無職の夫の家事労働時間」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』60、259-263

21) 牧野カツコ (2010) 「「しつけ」にみられるジェンダー意識」(牧野カツコ他編著『国際比較にみる世界の家族と子育て』ミネルヴァ書房、36-42

22) 平井太規 (2022) 「子育て期・夫の家事・育児参加は妻の負担を軽減するのか - 「社会生活基本調査」政府統計匿名データによる分析から - 」

<https://www.ier.hit-u.ac.jp/Common/publication/DP/DPS-A737.pdf> (アクセス日 2025.10.13)

23) 金子 楓 (2020) 「母親のゲーティングに関する研究 - 乳幼児期の子どもをもつ親を対象として - 」筑波大学大学院人間総合科学研究科、博士学位論文要旨、1-5

<https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/records/2001888>

(アクセス日 2025.10.13)

[参考文献]

1) 平田道憲 (2004) 「家族成員のアンペイドワーク時間」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』53、385-391

2) 平田道憲 (2011) 「家事労働時間からみた家族関係」『家族関係学』30、45-53

3) 内閣府男女共同参画局 (2017) 「「平成 28 年社会生活基本調査」の結果から - 男性の育児・家事関連時間 - 」

https://www.cao.go.jp/wlb/government/top/hyouka/k_42/pdf/s1-2.pdf (アクセス日 2025.10.13)

付記 本稿は、日本地域福祉学会第 25 回大会 (2011 年 6 月 5 日) において口頭発表した内容に、加筆、修正したものである。

Interaction Between School-age Children with Disabilities and Their Fathers from the Perspective of Time Use

Rie FUKUTANI

Abstract: I conducted a survey of children and students with disabilities in Hiroshima Prefecture that analyzed their time use with their fathers based on data gathered from their daily activities. The survey period covered four days in total: one weekday and one Saturday during the regular school term and one weekday and one Saturday during the long vacation period from November 2004 to October 2005. Regarding the time children spent with their fathers, on weekdays during both the regular school term and long vacations, interactions were limited to short periods outside of daytime hours due to the fathers' work schedules. The nature of these interactions was restricted to a few specific activities, such as sharing meals in the morning and evening. On each Saturday during the regular semester and long vacations, an increase in the time children spent with their fathers was observed. The way children interacted with their fathers on Saturdays showed an increase in activities related to "play" and "transportation," suggesting that fathers play a significant role in leisure activities. A characteristic of the time fathers spend interacting with their children is that it often occurs with the mother present, and the time fathers spend with their children without the mother being there is short, even on Saturdays. However, judging from the individual data of employed mothers, it is difficult to say that the presence of the father has been much of a support for the mother's employment.